

特集●厄除観音

牛伏寺にて



金峯山牛伏寺

中嶋 嶺雄



牛伏寺表門

牛伏寺の魅力

同じ大乘仏教なのに中国の寺と日本の寺とは、どうしてこんなにも景観が異なるのだろうか？ といった素朴な疑問に発し、結局、それは文治社会（中国）と武治社会（日本）の伝統の違い、「文」と「土」の民族性の違い、さらには日中間の美意識の違いに帰着するのではないかという結論に達している私は、正直なところ、中国の寺よりも日本の寺の方が美しいと思う。

日本の寺といっても、奈良や京都の名刹ばかりでなく、たとえば上田郊外の塩田平の前山寺や松本郊外・鉢伏山腹の牛伏寺といった



北アルプス連峯を望む

信州の山寺の鄙びた趣きがなんともいえないと私は感じている。

松本平の厄除観音としても知られる牛伏寺（ごふくじ）は、唐の玄宗皇帝の使者が大般若經六百卷を二頭の牛に積み、善光寺への奉納の途中、この寺の麓で突然斃れたという因縁で命名された真言密教の寺で、藤原期の重要文化財を多数蔵した由緒ある一山である。赤松、唐松、杉、檜の木の茂りを背にした寺院全体の構成が見事で、五重の塔や三重の塔がないのに、これほど立体的なコンポジションを形づくっている点でもユニークだ。

とくに開孔窓のような表門から見た本坊の格子の白壁、泉水池を隔てて見る如意輪堂の厚い萱葺屋根、観音堂脇のいささかスリムな廻廊などは、私の好きな風景だ。松本平からは一般には見えない穂高連峰も、このあたりまでくると姿を見せるのが、また格別である。

私の松本の山荘からは、車で二十分足らずなので、これまでも何人かのお客を案内したが、奈良や京都の寺を見てきた外国人が、ことのほか、この牛伏寺を気に入ってくれる。いささか郷土自慢が勝ちすぎているのではないかと自戒しつつも、たまたま松本へ講演に行かれるという猪木正道先生（平和・安全保障研究所会長、青山学院大教授）にお話したところ、猪木先生は講演のあと早速、牛伏寺を訪

ねられ、その雰囲気魅せられて、今度は奥様をお連れしてまた行かれたとのこと、長く京大教授として京都の寺院を見つくされた猪木先生御夫妻がそう感嘆されるのだから、たんなる郷土自慢ではないと思つた次第である。

これぞ浄土

数年前の夏、軽井沢の中央公論社の山荘で執筆していたとき、ドナルド・キーンさん（コロンビア大学教授）を塩田平にお連れしたことがあった。キーンさんも日本の寺を知りつつ知っている方だが、前山寺などを大変気に入っていただけで、今度は前山寺の法縁にも当たる牛伏寺へ御案内しますと約束しながら、まだ果たしていない。今夏こそはと思つていた矢先、近著『少し耳の痛くなる話』（新潮社）を贈っていただいて恐縮しているのだが、私自身は、昨年の夏も、丁度お盆の入り（八月十三日の夕暮れ、或る客人を伴つて牛伏寺へ行ってきた。旧知の若僧正に本坊でお茶をいただいで外へ出ると、草木の香りを含んだ夏の涼気が肌をさすようで、その静寂の夜陰に、遠く近く松本平の灯が明滅し、これぞ浄土と一瞬悟つたのであった。

（なかじま みねお 東京外国大学教授）